

研 究 発 表 要 旨

り、その結果、就学当初における CA が低いものほど知能偏差値において有利になる、という解釈である。

その後吾々は、小学校低学年の児童を対象として、MAの等質化の過程について調査を行った。吾々の得た資料は、MAの等質化が小学校入学後の2年間に於いてほぼ完了することを示唆している。

517 大学生の知能と学業成績に関する問題（その3）：村田明（山形大学）

小、中学校では、知能と学業成績の間に相当高い相関の見られるということは既に定説となっている。所で大学ではどうであろうか。あるのか、ないのか、あるとすればどの程度か。いずれにせよ、その原因は何か。という問題を学生が只単に学内諸活動に現わすもののみを取上げようとせずに、広く学外諸行為の中に現われたものをも取上げて、多方面に亘り調べようとするものである。

19. テ レ ビ

429 T.V. 教育番組に関する基礎的実験研究 第2報告—アイ・カメラの使用について—：①富田悟（科学警察研究所）・城戸幡太郎・村田宏雄（東洋大学）・②堀内敏夫（東京学芸大学）・多湖輝（千葉大学）・大川信明（日本リサーチセンター）・高桑康雄（国学院大学）・高橋勉（早稲田大学）

目的：アイ・カメラを用いて、テレビ画面上における視聴者の注視点の移動状況を観察し、伝達情報と受容情報とのズレを生ぜしめるような諸要因の発見を試みる。特に問題となるのは、映像構成の技術と、視聴者の視聴態度——注意の配分を中心として——である。

手続き：1) 静画4枚について軌跡図法（5秒間）、動画（約23秒）について駒送り法（100mm/sec）によって注視点の移動状況を測定。

2) 動画については前後テストにより、情報受容の程度をみる。

主な結果：1) 画面注視には部分注視と全体注視とがある。2) 刺激画面内に特に勾配がないと、最大注視点は人によって異なる。3) 注視状況と受容情報の正確度はほぼ対応する。

430 同上 第3報告—TV映像の分明度の差によるE.E.G. α 波の通減現象に関する実験—

本実験はTV映像の分明・不分明刺激がE.E.G.の α 波にどのような影響を与えるかを明らかにすることによって、TV映像の分明度を区別することが可能であるかを調べる意図をもって、試みたものである。

映像の分明・不分明の差を、まず全体図形と部分図形により、次に、画面を全体的に把握することは、概念のある・なしにより、E.E.G.にどのような変化があるかを実験した。

実験結果の脳波は八項調和解析により α 波（7.5～13cycle/sec）を中心に、0～15cycleまで分析し、 α 波通減現象の多少の比較を試みた。実験結果ならびにその考察については、研究発表当日、詳しく報告する。

432 テレビの児童に及ぼす影響（第1報）1. 総論：①依田新（東京大学）・②長塚和弥（埼玉大学）・③森正義彦・④大沢武志・⑤筒井健雄・⑥井上健治・⑦古沢頼雄・⑧山下栄一（東京大学）・⑨都築秀行（大田区立大森第一中学校）・波多野諠余夫・吉田章宏・⑩足立自朗・⑪肥田野直（東京大学）

本研究は民間放送連盟からの委託によるもので、昨年9月に委託を受け発足した。東大教育学部教育心理学研究室が中心となり、新聞研究所の池内一助教授を加えて研究体制をととのえ、原則的に隔週に研究会を開いて相互討論をかわして今日に至っている。当初は文献研究から出発し、今までにどのような研究が行われてきたかを

教育心理学年報第1集

明らかにした。その上にたつて、どのようにすればテレビの影響をとらえられるかということについて論議した。その結果必ずしも十分な確信を持つに至らなかったが、数回の予備テストによる検討の後に、つぎの6班に分れてそれぞれ下記のテーマを分担し調査を実施した。第2次計画である実験的研究も現在進行中である。

433 同上 2. 研究方法

イギリスのヒンメルワイトらにならい、個人別マッチング法によりテレビ群と非テレビ群とを種々の側面から比較した。すなわち、年齢・性・知能・社会階層などはほぼ等しいが、一方は家庭内でテレビを長時間視聴し(テレビ群)、他方は家庭にテレビがなく guest-viewing も少ない児童(非テレビ群)を一人ずつ対にして二群を構成し、その比較からテレビの影響を推測した。調査対象は東京都大田区の区立中学校2年生及び小学校5年生である。商工住の三地域から中学各2校計6校と、同学区に属する小学校17校を選んだ。対象数は小中各3000名で、これらに実施した予備調査に基きマッチングを行ない、小中各約250対を得、本調査を実施した。

434 同上 3. 興味・表現

TVは視覚的聴覚的メディアだといえるが、視覚的には特に持続的な緊張を要求するところから、視覚面を通じての何らかの影響というものが予想される。この研究ではさしあたり、同一場面での視覚的言語反応と非視覚的言語反応とのどちらを自分の感じ方に合うものとして受け入れようとするか、その受け入れ方に影響するかどうかをみようとした。更に、TVの送り出す内容が、受け手の知的関心にどう影響するか、(例えば特定の関心を高めることになるか、一般的な関心の強さを変えることになるか、など)を、各種の行為をあらわす45項目につき、おもしろく思う程度によって、7段階に評定させた結果から考察した。

435 同上 4. 性格(その1)

現在のテレビ番組の大半は、娯楽的な傾向のもので、児童の視聴態度は、努力によって何かを学びとろうとする創造的なものとはいえない。したがって、テレビ視聴行動は消極的(受動的、非創造的、娯乐的)行動と考えられ、ひいてはテレビの影響として受動性の増大が云々されている。しかし、これまでの研究の殆んどが、この点について否定的な結果を得ており、いわば楽観論が優勢のようである。しかし、われわれはこれまでの研究方法に満足できず、新たに Positive-Negative Test を作成し、この点について再検討を試みたものである。

436 同上 5. 性格(その2)

テレビを長時間視聴する児童は画面の前に長い間じっとしていると考えられるから、身体的な活動性が劣ることと関係があると思われる。従って、この点についての質問項目をつくり、テレビ群と非テレビ群の得点を比較した。また、児童の社会を視る見方がテレビ視聴によって影響されることがあるかどうかという点をみるため、いくつかの「社会観の型」についての選択肢を用意し、選択させることによって、テレビ、非テレビの2群を比較した。これについては現状肯定的態度、現状否定的態度、個人主義的態度がテレビ視聴とどういう関係にあるかをさぐってみた。

437 同上 6. 友人関係

テレビが児童の友人関係に及ぼす影響としては、テレビ視聴による友人との接触頻度・時間の変化、視聴した内容による「友人観」の変容などいくつかの面に分けて考えることができる。ここでは、テレビの視聴行動(及びその蓄積)あるいは視聴内容が現実の友人関係の中にどのように入りこみ、どのような比重を占めているかという面から検討しようとするものである。友人間の話題、対友人活動の量、対友人活動の好み、友人選択行動などの調査結果を分析して、一般的傾向を明らかにし、またテレビ群・非テレビ群の比較を行なった。